

6. 当院を退院した脳卒中患者の症状経過について

旭 俊臣, 根本芳枝

(旭神経内科)

昭和58年と61年に入院した患者80名の退院時, 2年後, 5年後の ADL について報告した。屋外自立は各々50%, 52%, 62%であった。5年後の生存率は72%, 寝たきり率は7%であった。死亡予防には心および呼吸器系の管理, 寝たきり予防にはリハビリに対する意欲向上をはかることが重要である。寝たきり在宅療養のためには往診, 訪問看護, 訪問リハビリが必要である。

7. 当院における単純ヘルペス脳炎の検討

一付. 関連病院集計の予報一

榊原隆次, 福武敏夫

(鹿島労災)

83~88年に当院で経験した単純ヘルペス脳炎 (HSE) 9例を検討したところ, 5名は側頭葉主体型, 2名は脳幹症状主体型, 2名は慢性例などであり, このうち3名を報告した。症例1は側頭葉主体型の61歳男性。症例3は慢性例~自然軽快例の66歳男性。症例2は脳幹症状主体型の45歳男性で, 意識障害, 吃逆様呼吸などを主徴とし, 頭部 CT で高度のび慢性脳腫脹と硬膜下血腫を認め, Ara-A 投与により軽快した。HSE の多様性に注意が必要と思われる。

8. λ light chain と AL アミロイドの同時沈着を認めた骨格筋仮性肥大

小宮山純, 高橋三津雄

(千葉労災)

全身諸筋の進行性骨格筋肥大・硬結を認めた IgA λ plasma cell dyscrasia の65歳男性例を報告した。筋生検で, tipe 2 fiber atrophy に加え, 小血管と結合織に AL アミロイドと λ light chain (PAP 法) の沈着を認めた。電子顕微鏡上, アミロイド線維と electron-dense な無定形物質の混在が明らかであった。本患者に対し dimethylsulphoxide (DMSO) 投与, 化学療法と血漿交換療法を施行したところ, 運動・呼吸・腎臓の諸機能に改善をみた。

9. Eaton-Lambert 型神経・筋block を呈した Sjögren 症候群の1例

今井尚志, 丹羽直樹, 本間甲一

八木下敏志行 (千大)

症例は58歳男性で, 1年半前から出現した両下肢易疲労感を主訴に来院。神経学的に, 四肢近位筋に軽度の筋

萎縮と筋力低下を認めた。2Hz 低頻度反復刺激で waning を呈し, 30Hz 高頻度反復刺激で 275% の waning を認めた。悪性腫瘍の精査を行なったが異常なく, Schirmer 試験の結果ならびに口唇生検所見から, Sjögren 症候群と判断した。膠原病が Eaton-Lambert 症候群の原因になり得ることを強調した。

10. 脳出血後の汎性注意障害に対する levodopa, benserazide 合剤治療の1例

上司郁男, 中村 勉, 岩淵 定

(七沢リハビリテーション病院脳血管センター)

症例は59歳男性。脳出血後, 左片麻痺とともに落ち着きのなさ, 粗雑さ, 無頓着な行動, 疾病への無関心など汎性注意障害が出現し, acute confusional state と考えられた。levodopa, benserazide 合剤の治療により注意障害は軽快したが, その中止で症状は悪化し, 同薬物が注意障害に有効であった。脳卒中後の汎性注意障害は, ADL 回復の支障になり, 上記薬物が ADL 回復の一助になると考える。

11. 急性有機燐中毒の臨床的検討

一神経筋接合部異常および中枢神経障害について一

桑原 聡, 小松隆行

(千葉県救急医療センター)

松前孝幸, 伊東範行

(千葉県救急医療センター・集中治療部)

渡辺誠介

(千葉県立衛生短大・看護)

Intermediate Syndrome を呈した急性有機燐中毒の5例において経時的に筋電図反復刺激試験により神経接合部機能を検討した。筋力低下の急性増悪時に一致して高頻度刺激のみで選択的に異常が出現し, 症状の改善に伴ないこの所見は消失した。このことは, 経過中に神経筋ブロックの性質に変化が生じていることを示しており, この現象が Intermediate Syndrome 発現に関与している可能性を考察した。また, ACh 過剰による中枢神経症状についても検討を加えた。

12. 発症10年後に原因の明らかとなった痙性対麻痺の1例

朝比奈正人, 山崎正子 (千大)

経過10年緩徐進行性の痙性対麻痺を主体症状とした胸髄くも膜憩室の一症例を報告した。脊髄くも膜憩室の診断は水溶性造影剤を用いたミエログラフィー, ミエロ